

【過度な貸出ボリューム目標の撤廃で貸出金利が反転】

多胡秀人
(2016/5/27)

日本銀行が国内銀行の3月における新規貸出に関わる約定平均金利を発表しました。

内訳を見ると、地方銀行の貸出金利が1.162%(2月)から0.906%(3月)まで大幅落下、1995年以来の最大の下げ幅となりました。

新聞報道では、

「(地方銀行は)中小企業向けと住宅ローンの金利が比較的高いから金利低下圧力が大きい。」

との証券アナリストのコメントが紹介されていましたが、大いに違和感があります。いくつかの地方銀行からも「現場を知らない」と厳しい声が広がっていました。こういうコメントを掲載するメディアの見識が問われます。

住宅ローンはさておき、そもそも地元の中小企業向けの貸出金利自体はさほど低下しているとは思えません。貸出金利が大きく下がったかどうかは、過去の高金利融資の返済や約定返済を受け、新規融資でどのように対処したかにかかっているのです。

3月に地銀の新規貸出金利が記録的に低下した主たる理由は、ボリューム症候群の地方銀行(圧倒的多数)が、地元以外の大都市部で超低利融資を急増させたこと、低金利の地方公共団体向け融資で量を稼いだことに他なりません。

筆者のところにはいろいろと情報が入ってきますが、隣県の優良企業に「ゼロ金利融資」のビラを配りまくって、顧客の失笑を買った地方銀行も一つや二つではありません。貸出残高にセンシティブになる3月なので期末要因は大きいとはいえ、思考停止の猪武者的なボリューム症候群には呆れてものが言えません。

ところが、こういう状況下でも3月に貸出金利が上昇に転じた地方銀行があります。

このような地方銀行には共通点があります。

すなわち、都市部の大企業や地方公共団体向けの融資を抑制し、地元での中小企業向け融資を地道にやっている地方銀行は貸出金利が下げ止まり、さらには反転しています。

詳しく見ると、地元の中小企業に対しては、ドロ沼の貸出金利競争に陥っている優良先だけではなく、業況の芳しくない事業者に対しても、地道に財務面でのサポートを行い、かつ本業面での支援もきちんと行っています。事業再生の取組みもしっかりとやっています。長期間にわたってリスク貸付債権を放置するような無責任体制ではありません。

まさに、リレバン王道銀行です。

リレバン王道銀行となるには、地元のお客様の目線に立って、過度なボリュームと決裂し、質を追求すべく、地元中小企業に丁寧な対応を行うための現場の意識改革が不可欠です。それを促すのは当然ながら、経営のコミットメントです。

その象徴が「ボリューム目標を撤廃」という現場の業績評価であることは間違いありません。

以上